

農事番組における「農業・農村」表象はいかに構築されたか—NHK ディレクターと農林水産通信員との交渉過程に注目して—

The Formation Process of the Representation of the “Agriculture/Agricultural Community” in Farm Programs: Focusing on the Relation between NHK’s Director and Local NHK Correspondents.

武田 俊輔¹, 加藤 裕治²

Shunsuke TAKEDA and Yuji KATO

¹滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科 The University of Shiga Prefecture

²静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科 Shizuoka University of Art and Culture

要旨 本報告の目的は、戦後日本における「農村」をめぐるメディア表象の構築プロセスについて、NHKで放映された「農事番組」を手がかりとして明らかにすることである。従来の研究のほとんどは都市住民の「農村」における伝統文化の発見といった観光的な消費のまなざしのみ注目して、減反や過疎化・高齢化といった社会問題を抱えた農村についての表象を論じてこなかった。また「農村」の表象とそれを視聴するオーディエンスの分析にとどまり、表象を創り出す制作者と表象される農村社会とのどのような交渉過程の中で、それらが構築されたのか論じていない。本稿はNHKの農事番組の制作において、NHKのディレクターと農村社会との間で情報を媒介した農林水産通信員が果たした役割に注目して上記の2つの課題について明らかにするものである。

キーワード 農事番組, 農林水産通信員, RFD (ラジオ・ファーム・ディレクター), NHK 農事部, 制作者と農村住民との交渉過程

1. 本報告の課題と先行研究

本稿の目的は、戦後日本の「農村」をめぐるメディア表象とその構築のプロセスについて、日本放送協会(NHK)が放送した「農事番組」と呼ばれるジャンルの番組、具体的にはラジオ第一放送の「早起き鳥」「ひるのいこい」、またNHK総合テレビで放映された「明るい農村」を手がかりとして、NHKにおける番組制作を担った農事部とRFD(ラジオ・ファーム・ディレクター)、さらに農村において番組制作において極めて重要な役割を果たした農林水産通信員(初期はRFD通信員、その後に農事放送通信員などと名称が変わるが、以下では「通信員」で統一する)、そしてNHK側と通信員との交渉過程に着目して明らかにすることである。

戦後日本における農村をめぐるメディア表象については、カルチュラル・スタディーズやメディア論の観点から幾つもの分析が行われている(例えば[Ivy 1995])。また伊藤夏湖はNHKの「明るい農村」等のテレビの農事番組における農村の表象とその変化を論じている[伊藤 2011]。一方、小林直毅は新日本紀行を題材にして、メディア表象の内容分析だけでなく、そのメディアを視聴するオーディエンスの受容の仕方にも視野を広げて議論を展開している[小林 2005:246-256]。

また近年では農村社会学でも「農業・農村」をめぐる表象に関する研究がわずかに生まれている。すなわち都市住民の農村に対する「観光のまなざし」[アーリ 1995]を活用して、都市住民との交流で地域社会を経済的に持続させようとする農村での取り組みが数多く現れる中、都市住民の側からの、農村のイメージやシンボルを消費の対象と見る農村表象の構築プロセスや、構築に関わる主体・組織の関係性、表象が地域社会にもたらす影響の分析の重要性が論じられている[立川 2005]。

しかし、こうした従来の農村をめぐるメディア表象に関する研究には、以下の2点で限界がある。第一に、農村に関するメディア報道において、こうした都市住民を軸足に置いた消費の対象としてのイメージのみが、農村をめぐる言説を占めたわけでは決してなかったにもかかわらず、伊藤を除けばその殆どがそうした表象にのみ焦点を当てている。だが1970年代の米の生産調整による農民の生産意欲の減退、出稼ぎの増加や兼業化、農村の過疎・高齢化、小規模自作農の脱落といった現象は、いずれも非常に大きな社会問題となり、マスメディアにおいて数多く報道がなされていたのではなかったか。そこには失われつつある「日本」をめぐる都市住民の消費的なまなざしというより、農家の立場、あるいは「農村」を他人事として消費しがたい農村出身者の立場に基づく農村認識が反映している。文化ナショナリズムやノスタルジアといった観点のみにとらわれずに農村のメディア表象を考えたとき、これらに目が向けられなかったことは重大な欠落である。

第二に、上記のメディア研究は全て、メディアの表象やそこにはらまれる政治性をめぐる分析、あるいはそれを受容するオーディエンスの環境や社会的文脈に基づく（能動的な）受容の分析にとどまっていることである。それらの分析の重要性は論を俟たないが、その当の表象を創り出しているメディアの制作者と表象される側の農村社会との交渉過程の中で、どのようにそれらが構築されたのかは明らかにされてこなかった。そもそも日本におけるメディア研究全体がメディア・テキストの言説、そしてオーディエンスによるその受容に関する分析に集中し、当のメディア・テキストの構築プロセスは所与のものとしてきたことに、その原因はあるだろう。

本報告では、マスメディアにおける記者や制作者による農村の対象化や取材に対して、農村側のインフォーマントはどのように自らの暮らしや地域社会を提示していったのか、そして両者のいかなる交渉の中でそうした表象は結実したのかについて、具体的な事例に即して論じていくことを目的とする。取材を受ける農村住民たちも制作者たちと接しつつ、一方的に描かれる客体にとどまるというだけでなく、時には取材をためらい、あるいは逆に積極的にその過程に参加して、自らが望む「農村」の像を描き出していったはずである。本報告は両者のいかなる交渉の中で農村をめぐる表象が結実したのかについて、具体的な事例に即して論じることを目的とする¹。

2. 研究対象と分析方法

本報告において研究対象とするのは、戦後のNHKにおいて、毎日放送されていた農事番組と呼ばれる番組群であり、それを制作すべく専門的に農業・農村を扱う専門部局として作られた「農事部」の制作者たち²、および各都道府県の地方局に農業・農村を専門とするディレクターとして配置された「RFD（ラジオ・ファーム・ディレクター）」、そしてRFDが農村に関する情報を収集する地域ネットワークとして任命された通信員たちである³。

農事番組の制作を可能にするために、全国の地方局に農事番組に関する情報収集の窓口となるRFDが置かれ、また全国のRFD同士が情報交換を行う組織も構築された。加えてこのRFDが農村に関する情報を収集するための地域ネットワークとして、農業改良普及員・生活改良普及員を中心に、各都道府県から合わせて約600人を通信員に任命している。通信員はRFDに対し、各地の農業・農家の状況や技術改良・生活改善の取り組み等について、600～1,000字程度原稿を月に1～2本程度執筆して情報を提供することが定められていた。こうして得られた情報が、ラジオ・テレビで毎日放送される農事番組の素材となった。

¹ こうした観点から報告者らは既に、テレビ番組「明るい農村（村の記録）」を対象を限定して、NHKの農事番組を担った農事部の制作体制や制作者たちの農業・農村へのまなざしとその変容から論じている[加藤・船戸・武田・祐成 2014]。また表象される側の農村社会の立場から番組制作のプロセスにおいて非常に重要な役割を果たした農村側のアクター（後述する農林水産通信員）についても、論文が公刊予定である[武田・船戸・祐成・加藤 2014]。本報告ではそれらの知見を踏まえて、その後の調査で分かった点を中心に通信員とNHKのディレクターとの交渉過程において、いかに表象が構築されたのか明らかにする。

² 後に名称は数回にわたって変更されたが、本報告において部局名は「農事部」で統一する。

³ なお農事番組の形成に至る歴史的経緯や番組の内容とその変遷については、今回合わせて行われる船戸修一・祐成保志の報告「農事番組における『農民』の表象とその変容」を参照されたい。

本報告において番組の制作者と農村住民との交渉過程を考察する上で、中心的に焦点を当てるのは、こうした通信員が番組制作において果たした役割、そして彼（女）らと番組制作者である東京のNHK農事部員や地方局のRFDとの間の交渉のプロセスである。通信員はNHKに対して農村をめぐる情報を継続的に送信するだけでなく、後述するように通信員が普及員として農村社会の中で培ってきたネットワークを提供していた。農村とNHKをつなぐ“媒介者”として、農事番組において彼（女）らの存在は不可欠だったのである。

本報告では、①かつて活躍した元通信員への聞き取り調査および手紙による調査（合計10名）⁴、②元通信員の実稿や体験記を集成した著作6冊、および③農事部の元制作ディレクターおよび地方局でのRFD経験者への聞き取り調査（6名）⁵に基づき、通信員が果たした具体的な役割やNHKに伝えられた情報、制作者と通信員との間の交渉過程について明らかにする。

3. 番組の制作体制

(1) 農事部とRFD（ラジオ・ファーム・ディレクター）

農事番組を制作した農事部とRFDについては、報告者らによる別稿を参照されたい[加藤・船戸・武田・祐成2014]。ここではそこで論じた内容を要約しつつ、その後の調査で判明した点について言及するにとどめる。

1960年代においてはNHKの制作局は教育・報道・芸能の三区画があり、農事番組は教育の中の教養放送に位置づけられて、農事部も教育局の中に置かれた。この位置づけは1973年に農事部が「農林水産番組班」へと変更されるまで続き、1980年には「農林水産事業部」となった。

このように東京の農事部で農事番組を制作するディレクターたちがいた一方で、前述のように全国の各放送局にもRFDが1～2名置かれた。NHKで制作部門を希望するディレクターは、入局してから早い時期に各地方局に配属されるが、その際に地方局の中にある様々な担当のいずれかがあてがわれ、そうした担当の1つがRFDであった。これは必ずしも固定されたものではなく、本人の希望や適性に応じて他の担当に移ることもあった。

RFDは農事番組の窓口として通信員からの情報を収集し、ローカルの農事番組（例えば毎週の「ひるのいこい」のうちの火曜日のローカル枠や、テレビでの夕方のローカルニュース等）の制作に当たった。ただしRFDを担当するディレクターは東京の農事部と直接的な組織上の関係があるわけではなく、またRFDとして培った農村社会とのネットワークを生かして自分の関心のあるテーマの番組を作る場合もあるなど、農事番組以外の仕事も行っている。そして東京に戻ってからも、その後必ずしも農事部に所属するわけではない。

(2) 農村における農林水産通信員の位置づけと役割

さてRFDに対して情報を提供する通信員の多くを占めるのは、県の職員である農業改良普及員・生活改良普及員であった。彼（女）らはNHK各局から各都道府県の普及事業担当課への依頼に基づき、県内各地の農業改良普及所長が、部下の普及員を通信員に指名する形で選出されていた。普及員たちは公務員であるが兼業が認められ、積極的に通信員としての情報提供と発信が奨励された。担当課や各普及所の側でもNHKの情報ネットワークを通じて農山村の状況や新たな取り組みを宣伝するPR手段としての広報的な役割への期待があった。

農村において普及員たちは極めて重要な存在で、農業改良普及員の指導には強い期待が寄せられていた。彼らは昼には自転車各農家を回って技術指導や相談に応じ、また夜は各集落での研究会で遅くまで指導を行い、酒席にもつきあう熱意が求められた。また生活改良普及員もかまどの改善や共同炊事等を中心に、担当する地域の各集落で女性グループの結成を促し、改善活動の指導に熱心にあたった。

こうした普及員たちの日頃からの農家や集落との信頼関係によって、通信員としての農村に関する情報収集も可能となっていた。多くの普及員には通信員を兼務して原稿を定期的を送るのは負担であり敬遠されたが、逆に

⁴ 聞き取り調査を行ったのは、以下の9名である。A氏（元農業改良普及員。2013年8月27日）、B氏（元生活改良普及員。2013年8月27日・28日、2014年9月25日）、C氏（元農業改良普及員。2013年9月4日・2014年9月2日）、D氏（元農業改良普及員。2013年9月17日）、E氏（元生活改良普及員。2013年9月18日）、F氏（元農業改良普及員。2013年9月18日）、G氏（元生活改良普及員。2014年9月2日）、H氏（元農業改良普及員。2014年9月25日）、I氏（元農業改良普及員。2014年9月25日）。また秋田県の元農業改良普及員であった佐藤菊雄氏には、郵送による質問紙調査を行った。

⁵ 聞き取り調査を行ったのは、以下の6名である。J氏（2012年12月28日）、K氏（2013年3月31日）、L氏（2013年9月14日）、M氏（2013年10月5日）、N氏（2014年8月27日）、O氏（2014年9月10日）。

やりがいを感じて積極的に希望した者は、20～30年にわたり通信員を継続して原稿を送り続けた。

通信員たちが自らの原稿を集めて出版した著作を見ると、集落の伝統行事や季節の話題と共に、個々の農家や農事研究会・4Hクラブ・女性グループによる新たな取り組みに関する内容が多い[佐藤1975・1977, 伊藤1980, 加藤1981, 山本1981, 堀井2012]。先述のように農事放送と通信員制度自体が普及事業と一体で創り出されたものであり、優良事例の紹介と普及は重要な目的であった。ラジオ番組「ひるのいこい」は、農村の風物詩や季節の話題等も取り入れつつも、そうした当初の目的もそのまま引き継ぐ形で放送されていた。

当時、昼食時に「ひるのいこい」を聴いている農家は非常に多く、何度も原稿が取りあげられる通信員は名前を知られていた。したがって農家からぜひ原稿にしてほしいとハガキを送ってきたり、取材の働きかけがあったという⁶。農水省や各県の農業普及課がNHKと協力して普及員を通信員としたのは普及事業の推進が目的であったが、農家や各グループもまた通信員とNHKを利用して自分たちの取り組みをPRしていく手段としていく。

このように、通信員たちは単なる農村社会に関するインフォーマントというよりは、自ら発信すべき内容を作り上げ、農村社会とNHKとを媒介しつつ番組作りに重要な役割を果たしていった。都道府県の農業普及課が期待する、新たな取り組みを積極的に進める農村のイメージに沿いつつ、農村社会の人々も単に一方的に表象されるというより、そうした仕組みをうまく活用して農村をめぐる表象を構築していくアクターだったのである。

4. NHK (RFD, 農事部員) と通信員との交渉過程

(1) 通信員とRFD・農事部員との関係性

通信員によるNHKへの情報提供について見ていく上で、まずは通信員と直接に接するRFDとの関係性について見ていこう。通信員とRFDとの間に密接な関係性を創り出すことを目的に、NHK各地方局では通信員を年に1～2回集めて、通信員会議が行われた[加賀谷1987:203]。そこでは放送局長、放送部長、RFD、アナウンサーと全通信員が顔を合わせて、通信員が勤務する地域の農業の情勢について報告し、その後は懇親会をするというもので、泊まりがけで行われることも少なくなかった⁷。

そうした交流を通じて、RFDは通信員たちとの関係を作っていくことになる。各地方局に赴任するRFDは、経験の浅い若手・新人であり、取材のノウハウも、また赴任先での取材のネットワークも当初ほとんど持っていない中、そうした機会に懇意になった通信員は情報提供の大事な伝手であった。RFDにとっては原稿の催促も兼ねて多くの通信員に頻繁に電話し、またしばしば訪ねていた⁸。

このような関係性の中で、普及員でもある通信員たちは、自らが何年もかけて作り上げた農家とのパイプをRFDに提供した。このようにRFDと通信員との密接な関係が成立したのは、NHKが農事番組に潤沢な資源と枠を投入しており、普及員としての仕事の現場や新たな取り組みを発信してもらえる期待感があったためであろう。

ただし東京の農事部に所属するディレクターが制作する全国中継番組に関しては、通信員からの情報が直接に用いられるということはほとんどなく、「明るい農村(村の記録)」のような番組には関心を持っていなかった元通信員も多い。しかし一方、東京に異動して農村の現場から離れてしまうディレクターにとっては、地方で築き上げた通信員との関係が後々まで番組の制作において重要になることも多かった⁹。このように通信員たちは潜在的な形で農事部の番組制作にも関わっていた。

(2) 通信員による原稿執筆と番組制作への関与

通信員の仕事の内容は「ふさわしい経営事例や風物詩など現地の情報をNHKに投稿すること」に加え、「農事番組のラジオ、テレビの各分野について直接間接取材や出演もあり、時によってニュース取材まで委嘱されており、現地取材班のようでもある」と多岐にわたる(岡本1973:98)。中でも中心は原稿の執筆であった。

とはいえ通信員に任命されても何を書けばよいか分からない人、文章を書くのが苦手な人も多く、RFDが指導したり、そのような通信員に電話で話を聞いた上で、その話の通り書いてもらう¹⁰こともあった。しかし、そう

⁶ A氏への聞き取り調査による(2013年8月27日)。

⁷ K氏への聞き取り調査による(2013年3月31日)。

⁸ L氏、N氏への聞き取り調査による(2013年9月14日, 2014年8月27日)。

⁹ L氏への聞き取り調査による(2013年9月14日)。

¹⁰ K氏、L氏への聞き取り調査による(2013年3月31日, 9月14日)。

した中で20～30年も通信員を継続して、合計2,000～3,000本の原稿を書き続け、大半が番組に採用される例も見られ、各県にいたそうした人たちがNHKにとって極めて重要なニュースソースとして機能していった。

通信員による原稿はRFDが手を入れ、「早起き鳥」「ひるのいこい」といったラジオの農事番組において通信員の名前と共に放送されたほか、通信員が撮影した写真を付してテレビでの夕方のローカルニュース原稿としても用いられた。内容によっては各放送局の判断で拠点局に送られ、関東地方・中国地方といった単位（管内中継）で放送されたり、時には全国放送に発展する場合もあった。

熱心な通信員たちは番組を日常的に視聴しては、文体や用語、文章の長さといった執筆のテクニックはもちろん、他地域で放送された話題で自身が配属されている地域で類似のものを探すなど、テーマについてもコツを習得して、それに適合した原稿を送るようになっていく。

中には原稿の執筆にとどまらず、自ら番組の制作に直接関わった通信員もいた。新潟県で35年間通信員を務めた佐藤菊雄は管内中継の「ひるのいこい」で15年間レギュラーとして原稿を担当したほか、自分で現地録音して構成した番組を、年10本ほど制作して放送していた[佐藤2001:391]。また佐藤は「明るい農村（農村新風土記）」で「米どころの夏」（1975年7月放映）という「日本の米どころの夏の様子を伝える」趣旨の番組への協力を求められ[佐藤2001:393]、番組の原案をディレクターに提案して実現している¹¹。このように通信員たちは、原稿執筆をはじめとして様々な形で農村に関する発信を行ったのである。

(3) 通信員のインフォーマルな情報提供による放送の活用

一方、RFDや農事部員の側から見ても、通信員との関係性は原稿の提供にとどまらない重要な意義があった。

先述の通り、1970年代における農村をめぐる、出稼ぎの増加、兼業化、過疎化・高齢化、嫁不足、減反政策、農産物輸入自由化といった状況の中、次第に農家グループによる取り組みも停滞していく。通信員たちは直接にそうした状況を原稿にすることは少なく、それを乗り越えようとする新たな取り組みに焦点を当てる傾向が強かった¹²。マイナス面を放送することがさらなる農業人口の減少を招くという自粛もあり、また県によっては減反問題や嫁不足問題については、普及所の上司から通信員に対して慎重な対応が求められていた¹³。

とはいえ、米の増産や農家グループの活動を支援してきた通信員たちが、こうした農村の状況に批判的な問題意識を持っていなかったわけではもちろんない。時として通信員たちは、それは農村の厳しい状況を訴えようとしている懇意なRFDや農事部員たちに対し、原稿以外のインフォーマルな情報提供を積極的に行い、それが番組へと結実していく。すなわち減反への反対運動や、自治体による小規模農家を切り捨てる酪農政策への批判など、元来はそれを口に出せない立場でありつつ、インフォーマルな形で関係者の紹介や取材への同行などを行った¹⁴。このように表向きは農政に従順でなければならぬ立場の普及員でありつつも、それに抗する農民たちの思いを汲み上げて電波に乗せていくという上でも、通信員は機能していたのである。

こうしたジャーナリスティックな切り口の番組は、「ひるのいこい」等を通じた通信員の広報的な役割を、各地のRFDや農事部所属のディレクターたちの、社会問題を描くドキュメンタリーを描きたいという問題意識に合わせて利用した面もある。しかし通信員たちは、単にNHKによって一方的に情報提供者として利用されていただけではない。むしろ自身では伝えられない農村の困難や農政の矛盾をインフォーマルな形でRFDに伝えて“ネタ”を提供することによって、農民の立場からそうした状況を社会的に訴え、問題化していくことができたのである。

5. 本報告の結論と今後の課題

本稿では、従来の農村をめぐる表象研究ではとりあげられてこなかった、農村の表象が農村社会とNHKという放送局との間のいかなる交渉過程を通じて構築されたかという問題について、農村社会とNHKの媒介者としての普及員兼通信員に注目して論じてきた。そこから見出されるのは、農村の特定のイメージが一方的にNHKのディレクターという単一のアクターによって表象され、全国に発信されるといった単純な図式ではない。そもそもNHKの農事番組は、全国に広がる通信員、そして通信員たちが培っていた農家たちとの信頼関係に依存す

¹¹ 佐藤氏に対する手紙での調査による。

¹² A氏、Y氏への聞き取り調査による（2013年8月27日、2014年9月25日）。

¹³ 佐藤氏に対する手紙での調査による。

¹⁴ [佐藤2001:394]。また佐藤氏に対する手紙での調査、またL氏への聞き取り調査による（2013年9月14日）。

る面が大きかった。通信員たちはNHKに対して自らが選び出した情報を提供して農村をめぐる表象に関するアクターであり、時には自ら番組の提案や制作まで行うことさえあった。

そして個々の農家や農家グループ、それに都道府県の普及事業担当課は、そうした通信員に直接働きかけることを通じて、農事放送において自らの立場に沿った表象を創り出させようとし、ある程度成功していた重要なアクターである。普及事業担当課は地域の農業をめぐる新たな取り組みをNHKの放送網を通じてPRし、通信員たちもまた、担当課や農家の働きかけに対して、それらが放送でとりあげられるよう原稿を書くことに心を砕いた。

一方で1970年代における過疎化や減反等といった農村社会の厳しい状況は、農林普及課の指揮下にある普及員兼通信員たちにとって、原稿という形でそれを伝えることは難しかった。しかし現状の困難や農家の苦境を知悉する通信員たちの中は、農村に共感しその厳しい状況を描こうとするディレクターたちの意欲をうまく活用して、自らの立場を損なわない形で、そうした状況や農家の声を番組に反映させることに成功する者もいた。

このように農事番組とは単にNHK農事部やRFDだけでなく、農村社会のアクター同士が情報提供やそのコントロールを通して相互に関わり合い、また利用し合うといったような、「農村」表象をめぐるせめぎ合いとも言うべきポリティクスが展開され、そうした中で構築されていったことが明らかになってきたのである。

参考文献

- 船戸修一・武田俊輔・祐成保志・矢野晋吾・市田知子・山泰幸 2012「テレビの中の農業・農村—NHK『明るい農村（村の記録）』を事例として—」『村落社会研究ジャーナル』19(1)：37-47.
- 堀井修 2012『人生はじけて』新潟日報事業社.
- 伊藤夏湖 2011「NHK『明るい農村』の軌跡—農地改革から自由化まで—」『放送メディア研究』(8)：85-120.
- 伊藤豊彦,1980,『だいらのつぶやき 農林水産通信員—西蒲原からの便り—』(自費出版)
- Ivy, Marilyn, 1995, *The Discourses of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan*, The University of Chicago Press.
- 加賀谷多吉 1987『野の道ひとすじに』(自費出版).
- 亀井圓了ほか 1952「RFDの活動の現況とその将来」『放送文化』7(6)：24-28.
- 加藤彦彦,1981,『べっかい酪農の四季』グループ北のふるさと.
- 小林直毅 2005「環境としてのテレビを見ること」 田中義久・小川文弥(編)『テレビと日本人—「テレビ50年」と生活・文化・意識—』法政大学出版局：127-169.
- 三神茂・寺山義男 1979「NHK農事放送30年史を語る」『農林水産省広報』10(7)：74-77.
- NHK編 1964『NHK年鑑』日本放送出版協会.
- NHK ライツ・アーカイブセンター編 2007a「明るい農村座談会(1) 戦後日本の理想を求めて」『アーカイブス・カフェ』2 (NO.5)：2-3.
- 2007b「明るい農村座談会(2) 大きく変化する産業構造の中で」『アーカイブス・カフェ』3 (NO.6)：2-3.
- 岡本元成 1973「農事放送通信員の所感」『普及事業25年』山口県農林水産部：98-100.
- 佐藤菊雄 1975『阿賀北の四季』(自費出版).
- 1977『阿賀北の便り』(自費出版).
- 2001『稲穂のかがやき』新潟日報事業社.
- 立川雅司 2005「ポスト生産主義への移行と農村に対する『まなざし』の受容」 日本村落研究学会(編)『消費される農村—ポスト生産主義下の「新たな農村問題」—』(年報村落社会研究第41巻) 農山漁村文化協会：7-40.
- 武田俊輔・船戸修一・祐成保志・加藤裕治,2014,「戦後ラジオ・テレビ放送における「農村」表象の構築プロセス—媒介者としてのNHK農林水産通信員に注目して—」『年報社会学論集』27(近刊).
- Urry, John, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage. 加太宏邦(訳)『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』法政大学出版局 1995.
- 山極榮司 2004『日本の農業普及事業の軌跡と展望』全国農業改良普及支援協会.
- 山本實 1981『あぜ道だより21年』(自費出版).
- 矢野敬一 2007『「家庭の味」の戦後民俗誌—主婦と団練の時代—』青弓社.